

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	石田 麻子
主な担当科目	芸術運営演習,芸術運営論Ⅱ,芸術文化と社会Ⅱ,卒業研究,文化政策論Ⅱ,音楽芸術運営特別演習 ①,音楽芸術運営特別演習 ②,文化政策研究Ⅱ,博士研究指導,博士特別運営研究③,博士舞台芸術マネジメント特講Ⅱ,博士論文演習③
シラバス	ここをクリック(本学ポータルサイトトップページが表示されます。) ※画面下「シラバス」>「シラバスを検索するにはこちらをクリックしてください。」をクリック
2023年の教育目標・授業に臨む姿勢	社会と芸術文化の関係性を適切に授業内容、運用に反映、学生および時代の要請に対応していく。多様な背景を持つ大学院生、留学生への対応をこまやかに行う。研究を通じて培った人脈や最新の知見など、獲得した成果を学生教育に取り入れる。マネジメント実践は表現系の学生たちにも必須であり、担当科目において、他コースの学生たちに、マネジメント力がなぜ必要なのか、その本質もあわせて教育していきたい。
2023年の教育に関する自己評価	「芸術文化と社会Ⅱ」では、現在の学生ニーズを反映した外部講師陣を招聘、運営系のみならず、表現系の学生たちのニーズにも対応した授業展開とした。学部3年生から博士3年生までの縦のつながりを意識したゼミ運用を心がけ、ゼミ発表会を全員でおこなったり、大学院の横断型ゼミでの意見交換などを積極的に実施した。留学生も含め、ジャンルの異なる領域への関心も喚起したこと、出身国の違いによって、教育などの相違を互いに理解しあうなど、大きな成果があがり、教員自身の気づきにもつながった。また、現役生のインターンシップ(1名、授業とは関係なし)採用、現役学生のアルバイト(3名)採用、修了生の調査員(2名)採用など、日ごろの自身の活動が直接学生たちの活躍につながるケースが複数あった。
2023年のFD活動に関する自己評価	セメスター制度に関する講座講師など、新たな教育改革に向けた大学のカリキュラムの取り組みに関して、教員同士で共有する場で、その方向性を示す役割を果たした。さらに、全体会の大きな場だけではなく、専門分野横断型のFDとなる基礎ゼミFDなどでは、よりダイレクトに教員同士の意見交換がなされるため、大学における基礎教育をどう位置付けるのか、教育課程の検討にも直接つながられるよう積極的に参加した。
授業改善のために取り入れた研修内容	担当以外の科目の授業を担当教員の許可を得て、複数回聴講(舞台芸術概論、クリエイティブスタディーズ)させていただき、最新の研究・教育に関する知見を広げた。さらにそれら授業の学生たちの受講の様子なども参考にしながら自身のシラバスを作成した。次年度廃止予定の「舞台芸術概論」は「芸術文化と社会Ⅱ」でも一部吸収する予定なので、授業参加によりその内容の検討にもつながられた。「基礎ゼミ」の発展形を4年生まで広げるという発想を得た。

2023 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1404 教員名:石田 麻子

1)アンケート結果に対する所見

短大、学部、修士、博士と多様な学生と向き合った半年(一年間)だった。年齢、出身国、性別、さらに出身校、本学での専攻や興味と関心など、一人ひとり全く異なると言ってもよいほどで、その多様さへの対応が最も重視されるべき状況になってきている。

「文化政策論Ⅱ」は世界の文化政策を扱ったもので、出身国や地域によって、受け止め方も違うものになるため、こまやかな配慮が必要となる授業である。とはいえ、世界共通の課題となっている SDGs に基づいた課題解決への動向、劇場運営からみた政策対応、社会と芸術との関係性など、多角的な視点からの話に努めたことで、学生からの一定の反応が得られたと考える。修士や博士のゼミも同様であるが、ゼミは個別に十分な対話の時間がとれるため丁寧に対応ができたと考える。

「芸術文化と社会Ⅱ」「芸術運営論Ⅱ」は、毎年音楽をはじめとする芸術文化のマネジメント領域の最前線でお仕事をされている方々のお話を聞けるため、学生たちは自身の将来を考えるためのよい機会になっていると感じ取れ、それがアンケート結果にもあらわれていると考える。

2)要望への対応・改善方策

具体的な要望は出ていないが、「文化政策論Ⅱ」「芸術文化と社会Ⅱ」「芸術運営論Ⅱ」は、予習・復習をしているという点の評価が低くなってしまった。その点を改善する方策を講じていく必要がある。具体的な宿題を課すというよりも、次の一週間のうちにどのような事項について考えたかをアンケートで問うようにするなど、徐々に自発的な学びが生み出されるようなやりとりを心がけていくようにしたい。

3)今後の課題

「芸術文化と社会Ⅱ」「芸術運営論Ⅱ」については、クラシック業界を中心とした講師陣となっていることを理解したうえで履修するように、シラバスの記載にも一層の工夫が必要となる。来年度からは、科目名も変更になる予定で、一層履修する学生と外部講師のマッチングがうまくいくものと考えている。「文化政策論Ⅱ」は、毎回必ず映像や音楽をつうじて理解をはかるような工夫をしたが、さらにそのような方向で講義をしていきたい。世界の情勢への理解から進めていって、各国の文化政策がどのように形成されているのか、まただれがそれを実践し、芸術創造の現場が活性化しているのか、興味をもって考えられるように、一層の工夫をしていきたい。いずれの授業においても、学生との双方向のやりとりに心がけ、対面での授業の効果が最大限にあげられるように努めていきたい。

以 上